

構文交替と項の変換

工藤和也

Abstract

English has semi-productive lexical processes for alternating the syntactic realization of verb's arguments. A valid lexical semantic theory needs to explain how the semantics of a verb corresponds to its syntax, and how it changes through the course of construction alternations. Introducing a wide variety of alternation phenomena in English, this paper makes two proposals. One is that natural language should have generative mechanisms which enable a speaker to map verb's arguments *selectively* onto its syntactic structure. The other is that lexical rules should have a form of effecting the value of argument variables, since any lexical operation which converts the semantic structure of a verb cannot be empirically tenable. *

キーワード：構文交替，項の具現化，生成語彙論，事象の主辞性，項の変換

1. はじめに

Fillmore (1970) が hit と break の構文形式の違いに関心を寄せて以来、語彙意味論の研究では、動詞の語彙的な意味の厳密な表示と、意味構造と統語構造との対応規則の提示を主な研究課題として、様々な言語現象を説明してきた（詳しくは Levin and Rappaport Hovav (2005) を参照）。中でも、意味的に共通する動詞群はその項の統語的な振る舞いも共通するという観察は重要で、Levin (1993) は動詞の語彙的な意味とその項の具現化の関係に基づき、英語の様々な動詞クラスとそれらが生起可能な構文の種類を列挙している。

例えば、動詞 hit は、(1a) のような通常他動詞文のほかに、(1b) のような道具目的語構文、(1c) のような動能構文、(1d) のような所有者上昇構文、(1e) のような道具主語構文などに生起できるが、(1f) のような非対格自動詞文や (1g) のような中間構文には生起できない。

- (1) a. Paula hit the fence (with the stick).
- b. Paula hit the stick against the fence.
- c. Paula hit at the fence (with the stick).
- d. Paula hit Deirdre on the back. (cf. Paula hit Deirdre's back.)
- e. The stick hit the fence.
- f. *The fence hit (with a stick).

g. *The fence hits easily.

(Levin 1993: 148ff)

一方、動詞 break は、(2e) の道具主語構文、(2f) の非対格自動詞文、(2g) の中間構文などには生起できるが、(2b) の道具目的語構文や (2c) の動能構文、(2d) の所有者上昇構文には生起できない。

(2) a. Tony broke the window (with a hammer).

b. #Tony broke the hammer against the window.

c. *Tony broke at the window.

d. *Tony broke Mary on the arm. (cf. Tony broke Mary's arm.)

e. The hammer broke the window.

f. The window broke.

g. The window breaks easily.

(Levin 1993: 241, 一部改)

一般に、ある動詞が2つ以上の構文に生起するとき、その動詞は構文交替を起こすと言われる。そして、(1) と (2) の対比が端的に物語っているように、ある動詞がどの構文に生起可能で、どの構文に生起不可能かは個々の動詞（あるいは動詞クラス）によって異なっている。このような構文交替現象は、動詞の統語的な振る舞いはその動詞の語彙的な意味によって決定されるという「語彙決定論」に基づく今日の語彙意味論の研究にとって、2つの重要な問題を提起している。1つは、個々の動詞の意味をどこまで詳細に記述すれば、上記のような項の具現化の様式が説明できるかという問題である。もう1つは、動詞の意味構造内の項はどのように統語構造に写像されるかという問題である。言い換えると、前者は hit と break のどのような語彙の意味の違いが (1) と (2) の違いを生み出しているかを明らかにすることであり、後者は (1) や (2) に含まれる各構文の項の具現化の様式を説明するためには、自然言語にどのような連結規則が必要かを明らかにすることである。

小論は、このような問題意識のもとに発展してきた今日の語彙意味論の研究に一石を投じる試みである。とりわけ、構文交替に関してこれまで数多く提案されてきた語彙規則による動詞の語彙概念構造 (LCS) 変換の議論を否定し、生成語彙論の枠組みから述語の項の具現化とその交替を説明している工藤 (2015) の分析を支持する。さらに、先行研究における語彙操作を総括し、人間言語のレキシコンにおける語彙規則の在り方として、「項の変換」という考え方の妥当性を主張する。

2. 意味と統語の非同形性

通常、語彙規則によって構文交替を説明しようとする場合、交替する片方の構文を無標とみなし、もう片方の構文を語彙規則の適用の結果とするのがもっとも一般的である。例えば、(3) の使役自他交替では、(3a) の自動詞文から (3b) の他動詞文を派生する他動詞化分析 (Lakoff 1970, Guerssel et al. 1985, Pinker 1989, 丸田 1998 など) と、(3b) の他動詞文から (3a) の自動

詞文を派生する自動詞化分析 (Keyser and Roeper 1984, Zubizarreta 1987, Levin and Rappaport Hovav 1995, 影山 1996 など) の対立が長らく支配的であった¹⁾。

- (3) a. The cup broke.
 b. Janet broke the cup. (Levin 1993: 29)

他動詞化分析では、それぞれ細かい違いはあるものの、いずれも状態変化を表す (4a) のような意味構造を基本とし、そこに動作主 (x) と使役関数 (cause) を加えて (4b) のように使役化するという語彙規則が仮定されている。

- (4) a. *break* LCS: y come to be BROKEN (Guerssel et al. 1985: 54)
 ↓ Causativization
 b. *break* LCS: x cause (y come to be BROKEN) (Guerssel et al. 1985: 55)

しかしながら、この分析には、どの動詞が使役化の適用を受けるかを動詞ごとに逐一指定しておかなければならないという語彙規則の適用可能性に関する問題が指摘されている (影山 1996)。特に、occur や exist など、Kudo (2010) が「真の非対格動詞」(true unaccusatives) と呼んだ自動詞の他動詞化を阻止する有効な手立てが必要である。その意味では、自動詞化分析のうち、Keyser and Roeper (1984) や Zubizarreta (1987) の分析も、(4) の矢印を反対にしただけのような考え方なので、同様の問題を孕んでいる。

一方、自動詞化分析の中でも、Levin and Rappaport Hovav (1995) は意味構造を変換することなく、他動詞から自動詞を派生する方法として、(5) の語彙的束縛 (lexical binding) という語彙規則を提案している。

- (5) a. [[x DO-SOMETHING] CAUSE [y BECOME BROKEN]]
 ↓ Lexical Binding
 b. [[∅ DO-SOMETHING] CAUSE [y BECOME BROKEN]]
 (Levin and Rappaport Hovav 1995: 108)

語彙的束縛は、他動詞の意味構造における動作主を抑制することで、項構造に外項が連結されないと仮定することによって、break の自動詞化を説明しようとしている。影山 (1996) の反使役化 (anti-causativization) も、細部は異なるものの、語彙規則によって動作主を抑制するというアイデアは共通している。ここで重要なのは、動詞の意味構造を変換するのではなく、項の値を変換するという語彙規則の考え方である。

ところが、(6) の場所格交替に関しては、Rappaport and Levin (1988) が (7) の語彙的従属化 (lexical subordination) という語彙規則を提案している。

- (6) a. Jack sprayed paint on the wall.

b. Jack sprayed the wall with paint. (Levin 1993: 46)

(7) a. [x cause [y to come to be at z]]

↓ Lexical Subordination

b. [[x cause [z to come to be in STATE]] BY MEANS OF [x cause [y to come to be at z]]]

(Rappaport and Levin 1988: 26)

場所格交替について、Rappaport and Levin (1988) は、(6a) の構文を無標とみなし、(6b) の構文は (6a) の構文から語彙規則によって派生すると考えている。その方法は、(6a) の構文の意味である (7a) の意味構造を、手段を表す BY MEANS OF という関数によって従属節に降格させ、代わりに場所の状態変化を表す意味構造を新たに主節に埋め込むというかなり大掛かりなものである。語彙的従属化は、もともと Levin and Rapoport (1988) が結果構文の分析で提案したものであるが、Rappaport and Levin (1988) はそれを場所格交替に応用したのである。この語彙規則によって、Rappaport and Levin (1988) は、(6b) の構文が場所句の状態変化を表すことや、場所句が動詞の直接目的語になることなどが一気に説明できるとしている。

ここで注意しておかなければならないのは、ここには LCS を仮定する理論の前提として、LCS における起因事象内の項が外項に、結果事象内の項が内項に連結されるという連結規則が存在することである。したがって、(7a) では主題に当たる y が動詞の直接目的語になるのに対し、(7b) では語彙的従属化の結果、場所に当たる z が動詞の直接目的語になるという項の具現化の交替が説明される。Speas (1990) も、同様の語彙規則を、同じく内項の項の具現化が交替する与格交替の分析に用いている。

Talmy (2000) の認知文法でも、(6a) の構文を無標、(6b) の構文を有標とする考え方があるから、場所格交替の派生の方向性は間違っていないのかもしれない。しかし、語彙的従属化が決定的に問題なのは、動詞の意味構造を大きく変換していることである。先に述べた使役自他交替と同様に、意味構造を変換する語彙規則は、その適用条件が明確でない限り常に過剰生成の問題が付きまとう。実際、場所格交替でも、使役的な移動あるいは位置変化の意味を持つと考えられる put や pour などの動詞では交替が起らない。

(8) a. I put books on the table.

b. *I put the table with (the) books. (Levin 1993: 111)

(9) a. Tamara poured water into the bowl.

b. *Tamara poured the bowl with water. (Levin 1993: 115)

ここで問題なのは、これまでの分析がすべて動詞の意味と統語を同形 (isomorphic) とみなしていることである。すなわち、上記のような LCS に基づく分析では、項構造を統語構造に結びつく直接的な意味表示のレベルとみなし、そこうまく項を連結できる適切な LCS を模索するという研究の方向性が見取れる。したがって、内項の文法関係のみが交替する場所格交替や与格交替では、もはや結果事象そのものを変換するしか適切な項構造を生み出す手段がないと

いう理論の不備に陥ってしまうのである。

工藤（2015）は、このような状況から脱却するために、意味と統語の同形性を否定し、Pustejovsky（1995）の生成語彙論の枠組みを採用することによって、意味構造内に存在する項が必ずしも統語構造に写像される必要はないという考え方を提唱している。例えば、工藤（2015）は、動詞 break の意味を（10）、動詞 spray の意味を（11）のように提案している。

(10) break

$$\left[\begin{array}{l} \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{be} (e2^*, y, \text{broken}) \\ \text{AGENTIVE} = \text{act} (e1, x) \end{array} \right] \end{array} \right] \quad (\text{工藤 2015: 54})$$

(11) spray

$$\left[\begin{array}{l} \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{move} (e2^*, y, z) \\ \text{be} (e3^*, z, \text{sprayed}) \\ \text{AGENTIVE} = \text{act} (e1, x) \end{array} \right] \end{array} \right] \quad (\text{工藤 2015: 59})$$

生成語彙論の考え方にとって重要なことは、動詞が複雑事象構造を有している場合、その下位事象を単位として事象の主辞性（event headedness）が決まるということである（Pustejovsky 1995: 72）。事象の主辞性とは、動詞の「解釈の焦点」（focus of interpretation）と呼べるもので、動詞の意味構造においてどの下位事象が重要であるかの基準である。工藤（2015）では、その決定方法について、次の3点が挙げられている。

(12) 事象の主辞性

述語のクオリア構造に含まれる下位事象は次のいずれかの条件に当てはまる場合に主辞とみなされる。

- (i) その下位事象が定項を含む。
- (ii) その下位事象内の項の内容が語彙的に指定される。
- (iii) その下位事象が意味的あるいは語用論的に焦点化される。

(工藤 2015: 57)

動詞 break では、結果事象である e2 に行為の結果状態である定項（broken）が含まれるため、ここが主辞的な事象（*で表示）とみなされる。一方、動詞 spray では、動詞と形態的に同形の結果名詞（y）を含む e2 と、定項（sprayed）を含む e3 が主辞的な事象とみなされる。

また、工藤（2015）では、意味構造から統語構造への項の写像について、従来の項構造を介在させる方法を破棄し、クオリア構造内の下位事象が直接、統語構造に対応する（13）の連結規則を提案している。

$$\begin{array}{ll} (13) \text{ a. } Q_A: R(e, x) \rightarrow [{}_{VP} x [{}_{V'} v VP]] & \\ \text{ b. } Q_P: P(e, y, z) \rightarrow [{}_{VP} y [{}_{V'} V z]] & (\text{工藤 2015: 55}) \end{array}$$

これらの仮定により、クオリア構造内で主辞のとみなされた下位事象のみを選択的に統語構造に写像し、残りの下位事象は意味構造内で背景化するという仕組みによって、工藤（2015）は、使役自他交替や場所格交替について、動詞の意味構造を変換することなく、その項の具現化の様式を説明している。

具体的には、使役自他交替は語彙的に主辞の指定を受けている e_2 に加えて、 e_1 を統語構造に写像するか否かの選択、場所格交替は語彙的に主辞の指定を受けている e_2 と e_3 のうち、どちらの下位事象を統語構造に写像するかを選択によって説明される。

- (14) a. $Q_A: \text{act}(e_1, x) \rightarrow \textit{shadowed}$
 $Q_F: \text{be}(e_2^*, y, \textit{broken}) \rightarrow [_{VP} y [_{V'} V \textit{broken}]]$
 b. $Q_A: \text{act}(e_1^*, x) \rightarrow [_{VP} x [_{V'} v VP]]$
 $Q_F: \text{be}(e_2^*, y, \textit{broken}) \rightarrow [_{VP} y [_{V'} V \textit{broken}]]$
- (15) a. $Q_A: \text{act}(e_1^*, x) \rightarrow [_{VP} x [_{V'} v VP]]$
 $Q_F: \text{move}(e_2^{**}, y, z) \rightarrow [_{VP} y [_{V'} V z]]$
 $Q_F: \text{be}(e_3^*, z, \textit{sprayed}) \rightarrow \textit{shadowed}$
 b. $Q_A: \text{act}(e_1^*, x) \rightarrow [_{VP} x [_{V'} v VP]]$
 $Q_F: \text{move}(e_2^*, y, z) \rightarrow \textit{shadowed}$
 $Q_F: \text{be}(e_3^{**}, z, \textit{sprayed}) \rightarrow [_{VP} z [_{V'} V \textit{sprayed}]]$

(14a) では、*break* の e_1 が背景化 (*shadowed*) され、 e_2 のみが統語構造に写像されるため、*The cup broke.* のような非対格自動詞構造が出来上がるが、(14b) では、動作主の行為も談話上、重要な情報とみなし、 e_1 も統語構造に写像させるため、*Janet broke the cup.* のような他動詞用法が具現化する。一方、場所格交替では、(15a) のように *spray* の e_3 を背景化すれば、*Jack sprayed paint on the wall.* のような使役移動構文が出現し、(15b) のように e_2 を背景化すれば、*Jack sprayed the wall (with paint).* のような場所句の状態変化を表す構文が出現する²⁾。(15) で e_2 や e_3 に * が2つ付いているのは、どちらも語彙的に主辞とみなされる *spray* の e_2 と e_3 のうち、(12iii) の語用論的焦点によって相対的な認知的際立ちを得て、統語構造に写像される下位事象を表している。工藤（2015）は、これが場所格交替について従来から指摘されている全体的解釈 (*holistic interpretation*) の出処であると主張している。

要するに、ここでのアプローチで重要なのは、動詞の意味構造と統語構造は非同形であると認めることである。これは LCS を核とする従来の語彙意味論の発想からの大きな転換になる。特に、生成語彙論の考え方にとって重要な選択的な項の写像の仕組みを採用することによって、動詞の意味構造を無理に変換することなく、構文交替における項の具現化の様式を適切に捉えることができる。これは構文交替における語彙規則の適用条件に悩まされなくて済むという消極的な理論の選択ではなく、クオリア構造に基づく動詞の語彙意味表示を仮定することによって、言語の創造的な意味の拡張や多義性を説明する有効な道具立てを得るという積極的な理論の転換である。

3. 語彙規則としての項の変換

では、人間言語のレキシコンに構文交替にかかわる語彙規則がまったく想定できないかという、そうではない。Kudo (2010) は、述語の項に直接作用し、項の具現化の交替を引き起こす語彙規則として、次の4つが存在すると主張している。

(16) a. 項の抽象化 (argument abstraction)

$$Q: P(e, x, y) \rightarrow Q: P(e, x_{arb}, y)$$

b. 項の降格 (argument demotion)

$$Q: P(e, x, y) \rightarrow Q: P(e, x^{\wedge}, y)$$

c. 項の置換 (argument substitution)

$$Q: P(e, x, y) \rightarrow Q: P(e, z, y)$$

d. 項の束縛 (argument binding)

$$Q: P(e, x, y) \rightarrow Q: P(e, x=y, y)$$

まず、(16a)の項の抽象化は、述語の項を不特定の値に変化させる語彙規則である。抽象化された項は特定の音声形式を持たず、統語構造で「任意の pro」(arbitrary pro)として具現化される(Rizzi 1986)。これにより、項の抽象化を受けた項は、文内には登場しなくなるものの、本来の意味役割を保ったまま総称的な対象として解釈されるようになる。

Fagan (1988) は、この語彙規則を、使役事象を表す他動詞の動作主に適用することによって、(17b)のような中間構文の派生を説明している。

(17) a. The butcher cuts the meat.

b. The meat cuts easily.

(Levin 1993: 26)

Fagan (1988) は、項の抽象化が LCS のレベルで適用されると考えているが、生成語彙論に基づく本稿の枠組みで言い換えると、この語彙規則は (18) のような動詞 cut の意味構造における主体役割の動作主に適用されることになる。(cut の語彙的な意味には道具の使用が含意されるため、その主体役割には動作主のほかに道具を表す i が組み込まれている。)

(18) cut

$$\left[\begin{array}{l} \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{CONST} = i: \text{instrument} \\ \text{FORMAL} = \text{be} (e2^*, y, \text{cut}) \\ \text{AGENTIVE} = \text{act} (e1^*, x, i) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

ここで x に項の抽象化が適用されると、この x は任意の x となり、その音声形式が失われる。

(19) $Q_A: \text{act} (e1^*, x, i) \rightarrow Q_A: \text{act} (e1^*, x_{arb}, i)$

そして、この意味表示を(13)の連結規則に従って写像すると、その統語構造は(20)のようになる。(なお、道具を表す*i*は統語構造に適切な基底生成位置がないため、この段階で背景化される。)

$$(20) Q_A: \text{act} (e1^*, x_{arb}, i) \rightarrow [_{VP} \text{pro}_{arb} [_{V'} v \text{VP}]]$$

$$Q_P: \text{be} (e2^*, y, \text{cut}) \rightarrow [_{VP} y [_{V'} V \text{cut}]]$$

任意の *pro* はすでにその音声形式を失っているため、このまま派生が進んでも最終的に文の主語になることはできない。そのため、Kudo (2010) は、主題に当たる *y* が代わりに主語位置に移動し、中間構文の表層形式が出来上がると考えている (cf. Hoekstra and Roberts 1993, Matsumoto and Fujita 1995)。一方、任意の *pro* となった *x* は、文内にはその音形が登場しないものの、統語構造には不特定の動作主として存在するため、解釈上、「誰が切ってもその肉は切れやすい」という中間構文の総称性を生み出すのに一役買っている (詳しくは Fagan (1992) を参照)。

ここで重要なことは、語彙規則を仮定する際に、その適用条件を明らかにすることである。仮に項の値を変換するという語彙規則が意味構造内の特定の項だけに恣意的に適用されるとすれば、前節で述べた LCS 転換の議論と同様の過剰生成の問題が生じることになる。その点、Kudo (2010) が項の値を変換する語彙規則は意味構造内のどの項に適用されても構わないと述べていることは極めて重要である。実際、動詞 *cut* の意味構造には、動作主のほかにも、道具や主題、さらには結果状態を表す定項が含まれている。このうち、定項については、そもそも項の値を変えるという操作にそぐわないので、規則の対象外になることは明らかであるが、そのほかの項については、原則、項の抽象化が適用されても良いはずである。(もっとも、道具項に規則が適用された場合は、本稿の仮定している連結規則では *vP* に写像される項は主体役割でもっとも認知的際立ちが高い動作主のみであるので、結果として、動作主と主題がそのまま具現化されることには変わりがない。)

実際、Kudo (2008) は、項の抽象化が *cut* の主題項に適用された場合は、*The butcher cuts easily.* のような本来的な他動詞の目的語が登場しない構文形式が出来上がると主張している。この構文は、Levin (1993: 39) が「動作主に特有の性質を述べる構文」(characteristic property of agent construction) と呼んだものに相当し、「その肉屋ならどんな肉でも簡単に切れる」のような、動作主の特徴を描写する個体レベルの叙述になる。その点で、この構文は、*Mary already ate (her lunch).* のような特定の目的語を削除する構文とは明確に区別される。Kudo (2008) は、項の抽象化の付随効果として、当該項を束縛する事象項が抑制されるとも述べており、このことによって中間構文や動作主に特有の性質を述べる構文は、主語の恒久的特性を述べる属性描写文になる。

次に、(16b) の項の降格は、意味構造内における項の卓立性を下げる語彙規則である。意味構造内における項の階層性については、Perlmutter and Postal (1984) の UAH や Baker (1988) の UTAH など、これまで様々な仮説が提案されてきたが、項構造全体におよぶ項の配列を言語普遍的に捉えられるような一般化は今のところ存在していない。そこで Kudo (2010) は、これまでのような意味役割による項の全体的な順序付けを行うのではなく、事象構造における下位

事象単位での項の順序付けの方針として, (21) の UPAH を提案している。

(21) Uniformity of Prominence Assignment Hypothesis (UPAH)

Identical relative prominence hierarchy of semantic arguments is represented by identical structural hierarchy between those arguments at the level of base structure.

(Kudo 2010: 88)

卓立性 (prominence) とは, 当該の項が事態にいかに関与しているかを示す認知文法で、基本的には行為連鎖に基づく事態内のエネルギーの流れに沿って決まる (Langacker 1991)。項の降格は, この UPAH によって規定された各項の階層関係を操作する語彙規則である。

例えば, すでに見たように, 動詞 cut の主体役割には動作主のほか、道具項の存在が仮定されている。この道具項は動作主が直接的に働きかけ、動詞の表す行為に不可欠に関与する介在道具 (intermediary instrument) であるが, act が束縛する項としては, 動作主よりも認知的際立ちが低い。したがって, cut の主体役割における項の階層関係は, UPAH に基づき, 「動作主 > 道具」となる。クオリア構造における左から右への項の並びは, 基本的にこの認知的際立ちの関係を反映している。

ここに, (16b) の項の降格が適用すると考えてみよう。項の降格は相対的に認知的際立ちが高い項に作用して, その項の優位性を降格させる語彙規則である。

$$(22) Q_A: \text{act}(e1^*, x, i) \Rightarrow Q_A: \text{act}(e1^*, x^\wedge, i)$$

(22) で \wedge で示された x は, 項としての認知的際立ちを下げられ, i との関係でその卓立性を失っている。これは関係文法 (Relational Grammar) の枠組みで言う「失業者」(Perlmutter and Postal 1977) の扱いに近いもので, 降格させられた x は, もはや主体役割から統語構造に連結される項として選択されず, 代わりに i が vP 指定部に写像される。

$$(23) Q_A: \text{act}(e1^*, x^\wedge, i) \rightarrow [{}_{vP} i [{}_{v} v VP]]$$

$$Q_F: \text{be}(e2^*, y, \text{cut}) \rightarrow [{}_{vP} y [{}_{v} V \text{cut}]]$$

この結果出来上がるのは, 動作主の代わりに道具が主語となった The knife cut the meat. のような道具主語構文である。この項の降格を仮定すれば, 道具主語構文で動作主が統語的に不活性になる事実 (*The knife cut the meat by the butcher.) や, クオリア構造で主体役割に関与する介在道具のみが道具主語構文の主語になれる事実 (Levin and Rappaport 1988) などがうまく捉えられる。

さらに, Kudo (2010) は, この項の降格が道具主語構文だけでなく, (24b) のような原料主語構文にも適用可能であると述べている。

- (24) a. She baked wonderful bread from that whole wheat flour.
 b. That whole wheat flour bakes wonderful bread. (Levin 1993: 82)

実際、作成動詞の *bake* の意味構造には *cut* の道具項と同じ位置にデフォルト項として原料 (material) が仮定される³⁾。

- (25) *bake* (*bread*)

$$\left[\begin{array}{l} \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{CONST} = \text{m: material} \\ \text{FORMAL} = \text{be} (e2^*, y, \text{in the world}) \\ \text{AGENTIVE} = \text{act} (e1^*, x, m) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

原料は動作主が何かを作成する際に直接的に働きかける対象であるので、主体役割に組み込まれていると考えるのが妥当である。したがって、道具主語構文と同じく、動作主を降格させれば、自然に原料項が主語に昇格することになる。

項の降格の適用条件について一言付記しておく、この語彙規則は UPAH に基づく各項の相対的な卓立性の変更に主眼を置いているため、統語構造に具現化される項の数を減少させるものではない。したがって、仮にこの規則が *cut* のような状態変化を表す動詞の主題に適用された場合、定項が主題が変わって VP の指定部に具現化されることになる。しかしながら、定項は語彙的主要部である V の補部領域にあって、そこから被 *c*-統御関係によって V の素性を満たすものであるから、そのような動詞句の構造は統語的に適切ではない。要するに、項の降格という語彙規則は、普段、統語構造には登場せず、意味構造内で動詞の意味を支えているシャドウ項やデフォルト項が存在する場合にのみ、その効果を発揮することになるのである。

さらに、(16c) の項の置換は、述語の項を別の値に置き換える語彙規則である。これは影山 (2000) の項のすり替え (argument surrogation) に相当し、動詞の意味構造内に同じ値の項が複数存在する場合に有効になる。例えば、Kudo (2010) が「疑似非能格動詞」(fake unergatives) と呼んだ自己推進型移動動詞の *walk* や *run* は、動作主の行為が主題の移動を引き起こすという使役の事象構造を持っており、行為の主体である動作主 (x) と行為によって移動していく主題 (x) が同一指標であるという語彙的な再帰構造を有している。(26) の *y* は経路を表す。

- (26) *walk*

$$\left[\begin{array}{l} \text{QUALIA} = \left[\begin{array}{l} \text{CONST} = \text{walking_manner} (\rightarrow e1) \\ \text{FORMAL} = \text{move} (e2, x, y) \\ \text{AGENTIVE} = \text{act} (e1^*, x) \end{array} \right] \end{array} \right]$$

このうち、主体役割の *e1* は *walk* の様態を指定する語彙的な性質により、主辞的な事象とみなされるが、移動を表す *e2* は移動の経路を指定しない限り、統語構造には写像されない。

- (27) a. John is walking (in place).
 b. John walked through the door.

(27a) では、脚は walk という活動をしているが、移動はしていないので、主体役割のみが具現化されていると考えられるが、(27b) では、移動の経路を示す through the door があるので、walk の形式役割も具現化されていることになる。このとき、形式役割の x は、主体役割の x に語彙的にコントロールされているため、統語構造上は音形を持たないゼロ代名詞 (PRO) として VP の指定部に具現化されると考えられる (Kudo 2010: 101)。

このような walk の意味構造に項の置換が適用されると、動作主と同一指標であった主題がまったく別の値に置き換えられる。

- (28) $Q_p: \text{move}(e_2, x, y) \Rightarrow Q_p: \text{move}(e_2^*, z, y)$

この結果、移動する主体が動作主とは別の個体に変更され、例えば、John walked the dog through the door. のような使役移動構文が作られることになる。

この項の置換のポイントは、この規則の適用を受けることによって当該の下位事象が主辞性を帯びるということである。(27a) で見たように、walk 単独では、形式役割の具現化は随意的であると考えられるが、形式役割内の項が規則の適用を受けた場合は、必ずその形式役割が具現化されなければならない。その証拠に、自己推進移動動詞を使った使役移動構文では、経路句の統語的具現化が義務的になる。

- (29) a. The general marched the soldiers ^{??}(to the tents).
 b. The rider jumped the horse [?](over the fence).
 c. We ran the mouse ^{*}(through the maze).

(Levin and Rappaport Hovav 1995: 111)

ただし、このこと自体は (12) の原則からすれば自然なことであり、これまでの語彙規則にも共通して当てはまる帰結である。要するに、項の値を変換するということは、無標の表現から有標の表現を生み出すことであり、その際に特定の項の値に注目するということは、意味的にその項を含む下位事象に注目することであるから、(12iii) の条件からすれば、規則の適用を受けた下位事象が統語構造に義務的に写像されるということは人間の言語活動の流れとしてはごく普通のことであると思われる。

もちろん、項の置換を walk の主体役割の x に適用することも理論的には可能である。影山 (2000) は、その場合は、動作主による強制的な使役ではなく、他者による介添えや付き添いの意味になると述べているが、最終的な文形式を見るだけでは、どちらの項をすり替えたか判断が難しい場合もある。例えば、先の John walked the dog through the door. では、「ジョンが嫌がる犬を無理やり歩かせた」という意味でも「ジョンが自分の意志で歩いている犬に付き添った」という意味でも解釈が可能である。結局のところ、すり替えられた項の判別は、話者の百科事

典的知識や文脈情報などに照らして個々に行うしかないだろう。

最後に、(16d)の項の束縛は、(16c)の逆で、もともと異なる値を持つ項を、意味構造内の他の項と同じ値に変える語彙規則である。名前は Levin and Rappaport Hovav (1995)の語彙的束縛に似ているが、その中身はむしろ影山(1996)の反使役化に近い。

前節で見たように、影山(1996)は反使役化を使役自他交替の説明に用いているが、影山の説明では、なぜ語彙的に同一指標を受けた項が意味構造内で抑制され、統語構造に写像されなくなるのかが明らかではない。語彙的にいかなる操作を受けた項でも、その結果の値をもって統語構造に連結されない限り、連結規則に例外を設けていることには変わりがなく、説明的妥当性を満たしてはいない。

一方、Kudo (2010)は、項の束縛によって意味構造内で同一指標を与えられた項は、統語構造に再帰代名詞として登場すると述べている。これは(30b)のような仮想再帰構文(virtual reflexive construction)の派生を説明するのに有効である。

(30) a. The butcher cuts the meat.

b. This meat cuts itself.

(Levin 1993: 84)

cutの意味構造に動作主と主題があることはすでに見たが、(30b)の構文は、(31)のように主体役割の動作主を形式役割の主題と同一指標に束縛することによって派生すると考えられる。

(31) $Q_A: \text{act}(e1^*, x, i) \Rightarrow Q_A: \text{act}(e1^*, x=y, i)$

主題に束縛された動作主は、そのまま同一の名詞表現として統語構造に具現化する。

(32) $Q_A: \text{act}(e1^*, x=y, i) \rightarrow [_{VP} y [_{V'} V VP]]$

$Q_F: \text{be}(e2^*, y, \text{cut}) \rightarrow [_{VP} y [_{V'} V \text{cut}]]$

あとは統語論の一般原理に基づいてVP内のyが再帰代名詞に置き換えられれば、(30b)の仮想再帰構文が具現化する。walkのようにあらかじめ語彙的に同一指標を持つ項と、項の束縛によって同一指標を受けた項との違いは、前者がPROのようなゼロ代名詞で具現化するのに対し、後者が、通常の再帰構文と同じく、再帰代名詞として具現化する点である。

意味的には、仮想再帰構文は動作主が主題と同一視されることによって、あたかも主題が自ら状態変化を起こしたようにみなされるので、必然的に主題の性質に注目した表現になる。これは影山(1996)が「内在的コントロール」と呼んだ概念に相当するだろう。実際、仮想再帰構文は中間構文と意味が似ているとされているが、両構文は異なる語彙規則の結果、派生されると考えられるから、両者には細部において違いがある。例えば、中間構文は個体レベルの叙述であるから、いかなる時制表現とも共起しないが、仮想再帰構文は文脈的な条件が整えば過去形でも使える(e.g. The problem solved itself.)。また、中間構文は動作主を抽象化するという操作によって派生するので、語彙的な条件として使役構造を持つ動詞であれば広く見られるが、

仮想再帰構文は項を束縛することによって派生するから、動詞が始めから語彙的な再帰構造を持つ wash や shave などには適用できない。

- (33) a. This material won't wash.
b. *This material won't wash itself. (Hundt 2006: 132)
- (34) a. Heavy beards don't shave easily.
b. *Heavy beards don't shave themselves. (Fellbaum 1989: 124)

そのほか、動作主の存在を強く含意する saw や slice などの動詞では仮想再帰構文が不可能になることも、項の束縛を仮定すると自然な説明が与えられる。

- (35) a. *Soft wood saws itself.
b. *These rolls slice themselves.
c. *Smooth surfaces paint over themselves. (Fellbaum 1989: 128)

(35) の隠れた動作主は、特定の道具を使うなどして動詞の表す行為に積極的に関与するから、意味的に主題による束縛を嫌うと考えられる。このことも影山 (1996) は反使役化による使役自他交替の適用条件に挙げていたが、結局、これらの条件は仮想再帰構文の生起条件とかなりの部分で重複する。

以上のように、英語における様々な構文交替も、意味構造を変換することなく、項の値を変換するという一様の語彙規則によって説明できることがわかる。述語の項はもともとその値に融通が利く変項 (variable) であり、その値を変換するということは、それほど負担の無い操作であるように思われる。今日の極小主義統語論が統語操作の最小性を目指しているように、語彙意味論でも、語彙操作の最小性を追求する理論が歓迎されるべきである。さらに、それが経験的にもより妥当であることが示されれば、その動きは今後も加速していくものと思われる。

4. おわりに

小論は、これからの語彙意味論の方向性として、意味と統語の接点に関わる重要な問題を解決するための妥当な言語理論の構築に向けた第一歩である。もちろん、本稿で取り上げたそれぞれの語彙規則には、その意味的な性質からさらに細かな適用条件が存在するだろう。実際、中間構文と仮想再帰構文も、意味的には同じような構文でも、適用される語彙規則の違いによって、構文に生起可能な動詞クラスが若干異なっている。今後はこのような規則の適用条件を精査する必要があるが、いずれにしても意味構造を変換する議論の欠点を補い、語の創造的な拡張の過程を説明するためには、本稿で示したような大きな理論的転換が不可欠であると思われる。

注

* 児玉徳美先生には立命館大学の学部生時代と大学院の修士課程時代に指導教員として言語学のイロハを教えてくださいました。当時から英語の構文交替ばかりを研究対象としていた私に、先生がいつも口にされていたことは、「特定の言語にだけ当てはまることを追究するのではなく、言語を串刺しにできるような言語理論を構築すること」の重要性でした。不出来な学生だったため、当時はその期待に十分応えることができませんでしたが、その後も構文交替の研究を進めていくにつれて、徐々にその本質に迫ることができ始めているような気がします。それもあの頃の児玉先生の粘り強いご指導のおかげであったと深く感謝しています。先生のご冥福を心からお祈り申し上げるとともに、小論を私のささやかな成長の証として先生に捧げたいと思います。

- 1) 両者の間に語彙規則による派生関係を認めない考え方に Fillmore (1968) や Jackendoff (1990) などがあるが、これらのアプローチでは、構文形式や文内での解釈に合わせて語彙エントリーを無限に拡張しなければならないというレキシコンの余剰性に関する問題があるため、本稿では扱わない（詳しくは Pustejovsky (1995: ch.4) を参照）。
- 2) 場所句の状態変化を表す構文での with 句の具現化については工藤 (2015) を参照されたい。
- 3) bake には状態変化動詞の用法もあるが、ここでは作成動詞の場合の意味構造を提示している。

参考文献

- Baker, Mark (1988) *Incorporation: A theory of grammatical function changing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Fagan, Sarah M. B. (1988) The English middle. *Linguistic Inquiry* 19: 181-203.
- Fagan, Sarah M. B. (1992) *The syntax and semantics of middle constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fellbaum, Christiane (1989) On the “reflexive middle” in English. *CLS* 25, Part 1: 123-132.
- Fillmore, Charles (1968) The case for case. In: Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.) *Universals in linguistic theory*. 1-87. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Fillmore, Charles (1970) The grammar of *hitting* and *breaking*. In: Roderick Jacobs and Peter Rosenbaum (eds.) *Readings in English transformational grammar*. 120-133. Waltham: Ginn.
- Guerssel, Mohad, Kenneth Hale, Mary Laughren, Beth Levin and Josie White Eagle (1985) A cross-linguistic study of transitivity alternation. *CLS* 21, Part 2: 48-63.
- Hoekstra, Teun and Ian Roberts (1993) Middle constructions in Dutch and English. In: Eric Reuland and Werner Abraham (eds.) *Knowledge and language, Vol. 2: Lexical and conceptual structure*. 183-220. Dordrecht: Foris.
- Hundt, Marianne (2006) *English mediopassive constructions: A cognitive, corpus-based study of their origin, spread, and current status*. Amsterdam: Rodopi.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic structures*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』東京：くろしお出版。
- 影山太郎 (2000) 「自他交替の意味的メカニズム」丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』33-70. 東京：ひつじ書房。
- Keyser, Samuel and Thomas Roeper (1984) On the middle and ergative constructions in English. *Linguistic Inquiry* 15: 381-416.
- Kudo, Kazuya (2008) The lexical derivation of English middles and event argument suppression. *Humanities Reviews* 57(4): 121-143. The Society of Humanities, Kwansai Gakuin University.
- Kudo, Kazuya (2010) *Argument realization and alternations: A theoretical investigation on the syntax-lexical*

- semantics interface*. Unpublished doctoral dissertation, Kwansei Gakuin University.
- 工藤和也（2015）「構文交替と項の具現化：生成語彙論的アプローチ」由本陽子・小野尚之（編）『語彙意味論の新たな可能性を探って』46-71. 東京：開拓社.
- Lakoff, George (1970) *Irregularity in syntax*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of cognitive grammar, Vol. 2: Descriptive application*. Stanford: Stanford University Press.
- Levin, Beth (1993) *English verb classes and alternations: A preliminary investigation*. Chicago: University of Chicago Press.
- Levin, Beth and Tova R. Rapoport (1988) Lexical subordination. *CLS* 24, Part 1: 275-289.
- Levin, Beth and Malka Rappaport (1988) Nonevent *-er* nominals: A probe into argument structure. *Linguistics* 26: 1067-1083.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (2005) *Argument realization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 丸田忠雄（1998）『使役動詞のアナトミー』東京：松柏社.
- Matsumoto, Masumi and Koji Fujita (1995) The English middle as an individual-level predicate. *Studies in English Literature* 72(1): 95-111. The English Literary Society of Japan.
- Perlmutter, David M. and Paul M. Postal (1977) Toward a universal characterization of passivization. *BLS* 3: 394-417.
- Perlmutter, David M. and Paul M. Postal (1984) The 1-advancement exclusiveness law. In: David M. Perlmutter and Carol G. Rosen (eds.) *Studies in relational grammar 2*, 81-125. Chicago: University of Chicago Press.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and cognition: The acquisition of argument structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Pustejovsky, James (1995) *The generative lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Rappaport, Malka and Beth Levin (1988) What to do with θ -roles. In: Wendy Wilkins (ed.) *Syntax and semantics 21: Thematic relations*, 7-36. New York: Academic Press.
- Rizzi, Luigi (1986) Null object in Italian and the theory of *pro*. *Linguistic Inquiry* 17: 501-557.
- Speas, Margaret (1990) *Phrase structure in natural language*. Dordrecht: Kluwer.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a cognitive semantics, Vol. 1: Concept structuring systems*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Zubizarreta, Maria L. (1987) *Levels of representation in the lexicon and in the syntax*. Dordrecht: Foris.

